



# Artist In School

心を揺さぶる  
「なぜ？」が生まれる

札幌アーティスト・イン・スクール事業  
おとどけアート2023記録集

発行 おとどけアート実行委員会

企画・編集 一般社団法人AISプランニング

助成 **赤い羽根共同募金** 

\*本書の無断転写、複製、転載を禁じます

\*この報告書は、赤い羽根共同募金の助成金を受けて作成しています

## はじめに

2008年度にスタートした「おとどけアート」は、札幌市内の小学校に一定期間アーティストを派遣し、子ども達と一緒に活動する機会を提供することによって、豊かな感性や価値観を育むことを目的とし活動を展開しています。

アーティストの派遣をきっかけに子どもと子ども、子どもと教職員、さらに学校と地域の出会いや交流の充実を視野に活動し、昨年度までに札幌市立小学校45校で実践を重ねてまいりました。活動を開始してから16年目を迎え「アーティストとの出会いとは?」「自分を見つける」「心をゆさぶる～」などのキーワードのもと、おとどけアートが「学校」という場で活動する意義を再考しながら現在に至っています。

おとどけアートは“いつもの学校”に、ある日突然アーティストがやってきます。アーティストは子ども達と同様に登校し放課後まで校内で活動します。時々学習をのぞいたり、一緒に給食を食べたりしますが、子ども達にとって、いつも接している友達や教職員ではない“不思議な大人”との出会いは、これまでに経験したことのない時間や空間や活動をもたらします。

今年度は光陽小学校、発寒小学校、中の島小学校の3校で実施しました。活動にあたり、事前に学校の特色や子ども達の様子などを踏まえてアーティストを選定しました。派遣されたアーティストは学校や地域の環境と子どもに対する夢や期待を理解し、そこでの可能性を追求することに努めることと、自身の持ち味を軸におきながら子ども達や先生方の反応を受け止め柔軟に活動を展開しました。

実施校では、校内で繰り広げられるアーティストの活動のみで学級学年を越えて参加したり、また地域の方にも声をかけて下さったりなど、先生方の熱意や温かさとおとどけアートへの期待の大きさを実感することができました。

「ある日突然やってきた“おとどけアート”」は「この学校とこのアーティストだからできた活動」となりました。限られた開催期間ではありましたが、この度その様子をここに報告書としてまとめました。

2023年度の活動報告書の発行にあたり、ご協力をいただいた学校の教職員、アーティスト、そして本事業の運営に携わる関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、これからは私たちは“いつもの学校”の中に子どもとアーティストの出会いの場をつくり、子ども達に新たな価値観や学びが生まれることを願い活動を進めてまいります。

おとどけアート実行委員会 委員長  
池田 悦子

## もくじ

04 おとどけアート とは	14 総括
06 活動紹介 発寒小学校×東方悠平	15 教職員の声
08 活動紹介 中の島小学校×櫛引康平	16 活動実績
10 活動紹介 光陽小学校×佐竹真紀	18 関連事業



## 「おとどけアート」とは？

「おとどけアート」とは、アーティスト(芸術家・表現者など)が札幌市内の小学校に一定期間通い、余剰空間をアトリエとして活用しながら創作活動を行うという事業です。小学校の日常にアーティストの創造活動に関わる非日常的な場と機会を提供することで、子ども達が多様な価値観に触れ感性が揺さぶられるきっかけを作り、豊かな情操を育むことを目的としています。

実際の活動では、アーティストが講師という立場ではなく、子ども達と休み時間に遊んだり、時に授業に参加したり、一緒に給食を食べたり、学校の日常に寄り添いながら一時的にですが小学校の一員として過ごしていきます。

またアーティストは、あらかじめ定まった創作のゴールや成果物となる作品のイメージを事前に設定するのではなく、子ども達、教職員、保護者、周辺地域の方々との出会いや交流を通して垣間見る学校の状況や地域の特徴など様々な情報をヒントに、それぞれの専門性(造形・映像・音楽・身体表現など)を活かした独自の表現を生み出していく為、学校ごとに取り組む内容が異なるのが大きな特徴です。

この活動を通じて育まれる新しい関係性が、学校生活及び地域の課題解決のきっかけとなり得るほか、参加するアーティストにとっても新たな活動領域を拓ける貴重な経験の場として位置付けられています。

※おとどけアート事業は、子ども達の芸術的な感性を育む札幌市の「子どもの文化芸術体験事業」の一環として「ハロー!ミュージアム」、「Kitaraファースト・コンサート」に並び、市内小学校を対象に年間3校で実施しています。(平成20年度開始、令和5年度末で延べ50校にて事業実施)

※この活動は、一定期間、住居と制作場所を提供するアーティスト支援プログラム「アーティスト・イン・レジデンス(AIR)」を雛形にしているため、その学校版として「アーティスト・イン・スクール(AIS)」とも呼ばれています。



アーティスト・イン・スクール ブログ ～2020  
<https://inschool.exblog.jp/>



アーティスト・イン・スクール ブログ 2021～  
[https://ais-p.jp/category/ais\\_blog/](https://ais-p.jp/category/ais_blog/)



## おとどけアート実行委員会

2008年設立。会員数12名。美術教育や社会教育の研究者(北海道大学など)、市内小学校教職員、文化団体職員、アーティスト、学生などの市民で構成。事業のコーディネートを担う事務局(一般社団法人AISプランニング)からの提案を受けて、アーティストや開催校の選定、実施プログラムに対するアドバイス、活動現場のサポートなどを行っています。おとどけアートの活動を通じて、子ども達が豊かな感性と多様性を学び、地域の人々とのつながりを活性化、促進することを目指しています。

## 一般社団法人AISプランニング

おとどけアート事業の事務局として活動のコーディネートを担当する一般社団法人AISプランニングは、学校、文化施設、商店街、公園など生活に身近な環境に着目し、アートを媒介として人々の新たな関係性が構築されていくきっかけを生み出す活動を展開しています。北海道内の様々な団体・地域・事業との連携によるアーティスト・イン・スクール事業の企画・運営や、アーティストの活動を支える文化施設の管理運営なども行っている団体です。

## 2023年度活動概要

### 札幌市立発寒小学校×東方悠平

【活動期間】 2023年10月18日(水)～2024年2月2日(金)  
【在籍人数】 児童439人、教職員34人 ※2024年3月現在  
【活動場所】 多目的室、廊下、グラウンド、体育館など

アーティストの東方悠平さんが東南アジアで体感した、日本とは異なる「バナナ」についての思い出を、さまざまな方法で子ども達と共有することを中心にした活動が行われました。

学校への訪問は3回に分けて行い、それぞれの間には、ベトナムから実際に生育しているバナナの様子を伝えたり、バナナ料理を紹介するビデオレターが送られました。小学校での活動では、「バナ活」と称してひたすらバナナに関する活動が行われました。バナナ畑になっているバナナをイメージし、緑色の養生テープを使ったバナナをたくさんつくりました。また、自身のバナナに関する思い出や、バナナについて調べたことを集めるポストを設置するほか、活動の後半では、作った大きなバナナを担いだり、音楽室の楽器を鳴らしながらグラウンドや校内を練り歩きました。

### 札幌市立中の島小学校×櫛引康平

【活動期間】 2023年11月1日(水)～2024年1月23日(火)  
【在籍人数】 児童560人、教職員35人 ※2023年3月時点  
【活動場所】 でん、廊下、音楽室など

アーティストの櫛引康平さんが中の島小学校に滞在し、「音」をテーマに活動を行いました。子ども達や先生から学校で聞こえる音を書き出してもらい、それらの音を「カタチ」として絵で表現し可視化するという試みを行いました。制作された様々な音のカタチは校舎に貼り出され、櫛引さんが制作した音楽作品と共に《学校の音のカタチ》として展示されました。

### 札幌市立光陽小学校×佐竹真紀

【活動期間】 2023年8月21日(月)～2024年3月8日(金)  
【在籍人数】 児童503人、教職員31人 ※2023年5月時点  
【活動場所】 廊下、階段、多目的室、体育館など

映像作家の佐竹真紀さんが校舎でたまたま発見した開校当初の写真を活用して、白黒写真の鑑賞会やお父さん・お母さんを探す会を開くなど、写真をテーマにした交流活動を行いました。また改築のため今年度で役割を終える校舎の窓に子ども達の似顔絵を描いたり、運動会の伝統行事「鯉の滝登り」の場面を再現するなど、現在と過去が交ざり合うような空間を生み出しました。学校開放日には佐竹さんの映像作品の展示も行い、多くの方々が訪れ作品を鑑賞しました。

2023年度活動紹介

## 札幌市立発寒小学校×東方悠平



### バナナで世界とつながる

アートにはもともと気づきや学びの作用が含まれていると考えていますが、そもそも学びの場である小学校に滞在して行うアートのプロジェクトなので、オルタナティブな「学び」というものを強く意識してプロジェクトを進めていきました。

「最近の子どもは、切り身魚が海を泳いでいると思っている」という都市伝説があります。真偽のほどはともかく、すでに加工され売られている便利な切り身のせいで、魚から広がる無限の世界に触れることができないのなら、なんとも嘆かわしいことでしょう。けれども一方で、大人は世界のことをどれほど知っているのでしょうか。僕はバナナの房がどこからどう生えてくるのか、考えもせずに今まで生きてきました。

ちょうど今年度、フィリピンやベトナムに滞在して、これまでに考えもしなかった、バナナから広がる世界に触れることができました。フィリピンにバナナプランテーションがつけられた歴史を学んだり、ベトナムの山に登って種がビッシリ入った野生のバナナをとりに行ったり、ビーガンレストランでバナナ料理を食べたりしました。それに加えて、今回担当していただいた先生との運命的な出会いもあり、プロジェクトの中心にバナナを据えることにしました。

小学校では、日本ではあまり見かけない緑色の短いバナナや、その種、花について皆で考えたり意識を向けたりするような活動を行っていきました。「学び」は即効性のあるものばかりではないので、子ども達がこの不思議な体験について、思い出したり振り返ったりしてくれる機会がそのうちふと訪れることを願っています。VIVA、バナ活!

東方 悠平



東方 悠平 / Yuhei Higashikata (アーティスト)

1982年生まれ、札幌市出身。現在は八戸市(青森県)在住。2006年に北海道教育大学札幌校 芸術文化課程美術コースを卒業し、2008年に筑波大学大学院芸術研究科総合造形領域を修了。2023年に、東京藝術大学大学院映像研究科博士後期課程を修了。「遊び」を手がかりに、立体作品やインスタレーション、参加型のプロジェクトなどを行う。2021年に文化庁の新進芸術家海外研修制度1年研修員として、ベトナムのフエ市に滞在。また、八戸市内でAIR-Hを主宰して、フィリピンのアーティストを中心としたアーティスト・イン・レジデンスプログラムの企画、運営を行なう。近年は東南アジアでの活動が多い。  
<https://www.higashikata.com>



©Higashikata Yuhei

### 活動の流れ

2023

7/10

#### 下見、打ち合わせ

校舎の前に広がる庭園を見学したり、普段の活動のことを聞いたり、担当の先生がエクアドルにご縁があるお話を聞いたりしたことや、東方さんがフィリピンでの活動に向けてバナナについて調べていたことが繋がって、バナナをモチーフにしたアイデアの輪郭が生まれました。

10/18~19

#### 1回目の滞在

活動の初日、給食時間のお昼の放送で謎の転校生として自己紹介を行いました。様々な学年の授業を見学しながら、学校側から要望を受けて、授業へも参加させていただきました。また、次回の滞在までの期間中に、自身の活動でベトナムに滞在していた東方さんから現地のバナナ畑を紹介するなどしたビデオレターが小学校に送られ、給食時間に放送しました。

12/12~14

#### 2回目の滞在

「はっさるーむ」と呼ばれる多目的室を活動拠点「はっさむバナナプランテーション」として、子ども達とたくさんのバナナを作りました。また、ベトナムに滞在した際の記録写真を掲示するなど、日本以外でのバナナのことを紹介しました。さらに、子ども達からバナナについての思い出や調べたことを募るポストも設置しました。

2024

1/29~2/2

#### 3回目の滞在

子どもが複数人で抱えるサイズの巨大なバナナを作り、御神体としてバナナ神社へ祀りました。また、円形に並んで巨大バナナを隣の人へ渡すリレーゲームを行ったり、神輿のように肩に担ぐなどして、校内や体育館、グラウンドを練り歩きました。

3/14

#### 最後のビデオレター

3回目の滞在終了後、給食の献立にバナナを入れていただけることになりました。その日の給食時間にビデオレターを放送し、活動の振り返りの機会にしました。



### 一人一人のバナ活とその先の可能性

東方さんがこの活動で用いた「バナナ」というモチーフは、おそらく誰もが目にしたことがあるものでありながら、意外と実態についてはあまり知られていないものとして、そしてコミュニケーションツールとしても効果的に機能していたように思う。知らない誰かとコミュニケーションをとるには共通する話題があれば円滑になるように、今回の場合はそれがバナナである。東方さんの視点で共有されるバナナの記録写真やそれにまつわる会話によって東方さんの考えや人となりが見え知れるような手段にもなっていた。実際の活動では、普段の生活では体験しないような雪とバナナを組み合わせたシチュエーションを設けて活動の印象づけを試みたり、おとどけアートでしかできないことは何かと模索しながら作りあげてくれた。

12月の活動からは拠点を設け、東方さんを中心に「バナ活」と称して様々な取り組みが行われていった。子ども達や先生は当初は「ばなかつ?」という状態であったが、活動が進むにつれて気づいたときには、子ども達それぞれが自分なりのバナ活を見出していたのが印象的だった。なぜか踊り出したり、バナナを神様と呼び始めていたり、大多数の子どもがバナナの練り歩きに参加している傍で静かにバナナ作りに邁進していたり、練り歩きに必要なだからバナナが描かれた旗を作ってくれたり、「バナ活」がひとりだけで動き始めていた。そんな子ども達の熱心な姿を見てか、先生方も授業のレクリエーションにバナナを用いたり、バナナについての調べ物を家庭学習で取り組ませたりしていることもあった。

発寒小学校の子ども達がもともと持っていた大きなエネルギーが「バナ活」という行為を通して発現した結果、熱狂的な盛り上がりと共に多くのものが生まれていったこの活動は、この先も色々なことができそうな可能性を予感させてくれた。子ども達にとっても一人一人「バナ活」のあり方は違いながら、きっと思い出に残るような不思議な体験になったにちがいない。

コーディネーター 杉本 直貴

# 札幌市立中の島小学校×榎引康平



## 学校の音のカタチ

2023年11月から札幌の中の島小学校へ転校生として通うことに。私は10月末からさっぽろ天神山アートスタジオ(\*1)に滞在しながら中の島周辺を散策し、少し歩けば公園や自然も多く過ごしやすい印象を持ちました。中の島というエリアは豊平川と精進川に挟まれた大きな中洲に位置していて、その精進川のすぐ隣に中の島小学校が建っています。小学校は新しい校舎となって数年ということでまだピカピカ、私が小学生の時に過ごした小学校とは異なり現代風なつくりの校舎でした。

活動が始まって廊下を歩いていると子ども達が「何をしているの?」と話しかけてくれます。話したりしていると子ども達が自分の世界に招待してくれます。絵を描いたり、好きなことを語ってくれたり、遊びや学校のルールを教えてくれたり。おとどけアートの活動は学校の中でアーティストとして表現する事と並行して、コーディネーターのみなさんと共に子ども達、学校で働く人、先生、保護者の方々、広くは周辺地域と接続するといった少し特殊な状況に身を置くことになり、転校生や大人といった立場を行ったり来たりしながら子ども達と接していると、私たちが何かをコントロールしたいという意識に駆られていることに気付かされる事もありました。転校生だからこそ子ども達と先生に怒られそうな事にでくわしたり、その一方でよそ者でもあるからこそ普段見慣れているであろう場所や物に新しい見方や刺激を作り出すことができたりもすると感じます。

実際の活動では最初にマリー・シェーファー(\*2)のような音の先人のエッセンスも借りつつ、子ども達に音に興味を持ってもらったり、中の島小学校で聞こえる音を教えてもらったり、それをカタチに作りかえたり、精進川の音を校内に流す機械を設置したり、音を様々な視点から考えてみるという事をやってみました。

いつか「あんな奴が来てたな」と思い出したり、日常の音へ興味を持ってくれる人が1人でも現れてくれたら嬉しい限りです。関わってくれた皆さん本当にありがとうございました。

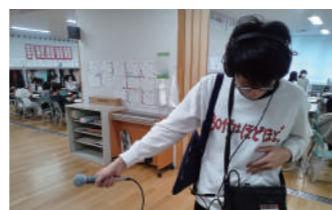
榎引 康平



©Ichinei Naoki

榎引 康平 / Kouhei Kushibiki (アーティスト・音楽家)

北海道江別市生まれ、土地・場所・環境、人との間をめぐる現象の研究をテーマに活動。主な作品では音風景のアーカイブプロジェクト《SOUND SCAPE COLLECTIVE》(2016-)や環境への音楽《Music for Dialog Deep》(2023)、音楽制作名義では usatoronicaとして活動。その他、オルタナティブスペース「ゲニウス・ロキが旅をした」メンバーとして運営に携わる。kushibikikouhei.com



子ども達と作った中の島小学校の音のカタチを廊下に貼り、図形楽譜として音楽を制作しました。

\*1 さっぽろ天神山アートスタジオ  
豊平区内にあるアーティスト(芸術家)等が滞在・制作ができるスタジオを備えた芸術文化施設。

\*2 マリー・シェーファー  
レーモンド・マリー・シェーファー (Raymond Murray Schafer, 1933年7月18日 - 2021年8月14日)は、カナダを代表する現代音楽の作曲家。音の風景、サウンドスケープ(soundscape)の提唱者。

## 『音の世界の住人』

昭和の時代のカセットデッキ、鈍器のようないかついマイク、耳当てのようなヘッドホン。装備は重く、それらをつなぐ黒く長いコードによって縛られているかのような不自由さで、それでもニコニコと笑顔、学校のありとあらゆる場所にふらりと現われ、時に子ども達の群れの中にもぐり込み、ひとつひとつの音を拾い集めている人。それが中の島小学校にやって来た不思議な転校生、今回の主役である『クッシー』こと榎引君だった。

その姿は活動が始まって数日もすると見慣れた光景になっていた。学校という環境の中で、子ども達と共に何ができるのかを日々模索しながら、マイペースで、静かに、ひっそり、しかしながらひとひととを感じる『音』への熱量を保ちながら、おとどけアートの活動は続いた。「転校生からの挑戦状」と題して音に関する質問を投げかけたり、子ども達や先生に学校で聞こえる音を模造紙に書き出してもらったり、それを段ボールでカタチにしてみたり。とにかく音、音、音。音ばかりである。正直、何がそれほどに彼を惹きつけるのか、魅了しているのかはわからない。でも、いつも笑顔で、古く重たい機器をカバン一杯に詰め込んで小学校にやって来るクッシー。活動の合間にマニア向けの録音冊子を誇らしげに見せて語るクッシー。そんな音が好きで好きな彼が小学校にやって来て、いつの間にか子ども達は友達になり、一緒に時を過ごす中で、その情熱は確実に伝わっていった。

アーティストが小学校にもたらすものは、そういった、何かに夢中になってしまった人の、無防備で無垢な姿なんだと思う。拾った石を宝物の様に大切に握りしめるその手、古い写真を見つめるキラキラしたその瞳、おおよそ他人には理解できないかもしれないけれど、どうしてもなく好きなものを見つけた人のその姿は、それだけで人生は素晴らしいんじゃないだろうか、と、そう思わせてくれる。

もちろん、類まれなる技巧や奇想天外な発想を持ち合わせている超人のようなアーティストもいる。けれどそれはアーティストの一面でしかなく、私がおとどけアートのコーディネーターとして、小学校に連れて行きたいアーティストはもっとシンプルで、その昔出会ってしまった「大切な何か」に対する初期衝動(初めてそれに出会った時の激しい情動の波)を今も持ち続けている、そんな人なのだ。だからこそ、その高い熱量は関わる周囲の人たちに伝播し、彼らにしか見えない世界の存在を教えてくれる。

まさにクッシーが活動の最終日、小学校の長い廊下の壁に貼り出した《学校の音のカタチ》という作品は、中の島小学校で行った彼の創作活動の成果であると同時に、彼が住む『音の世界』を我々に垣間見せてくれたのだと思う。

最後に、忘れられない活動中のワンシーンがある。(写真は本誌19P)真冬の吹雪の中を凍った精進川において録音しているクッシー。その時の表情は見えないけれど、きっとその顔には笑顔が浮かんでいたのだろう。・・・まさに音の世界の住人、音の虜である。

コーディネーター 小林 亮太郎



2023年度活動紹介

## 札幌市立光陽小学校×佐竹真紀



「今年度で校舎が建て替えられるので、何をしても良いです」という数野陽子教頭先生からの寛容すぎ、自由すぎる宿題が出てから約半年間、3月2日の学校開放日に向けて準備をしてきました。当日は校舎のあちこちから笑いや歓声が聞こえ、予想を超える沢山の保護者や地域の方々、卒業生の方が同窓会の様に楽しんでいる姿を見て、皆の記憶がリンクする、学校という場所が持つ力を感じました。

私はこれまで写真を使ったアニメーションを制作しており、当初はいつもの手法で制作しようと思っていましたが、コーディネーターの小林亮太郎君の「もうどんな物ができるか想像できます」の一言で、普段とは違う事をしてみようと方向転換。学校全体を使った展示計画。またとない機会です！

### 『光陽っ子、集合！』

最初に自己紹介も兼ねて、今までの映像作品を見てもらうことにしました。プロジェクターで投影したところ、作品の内容よりも、光だ！影ができる！に興奮した子ども達はプロジェクターの前に立ち、影遊びを始めるのでした。このまっすぐな反応には、映像はただの光と影ということを再認識させられ、影を楽しめるような展示というアイデアを得ました。

また、控室として使用していた談話室には、開校当時の大量の写真、アルバムが残されていました。私は古い写真を見るのが大好きで、この活動にはこのアルバムを使わせてもらおうと決めました。今まで開かれることが無かったであろう重たいアルバムを運び出し、思い出の押し売りのように、子ども達に見てもらうことにしました。すると古いモノクロ写真を見た時に「怖～い」という感想が聞こえました。教科書などで見る関東大震災や戦争など想起させるからでしょうか？

古い写真を見ていたら、私が小学生の頃、幼い母の写真初めて見た時の記憶が蘇ってきました。祖父が写真家だったこともあり、モノクロ写真がたくさん残っていたの

です。母にも自分と同じ子ども時代があったのかと思った覚えがあります。この小学校は保護者も同じ光陽小学校卒業の方が多いと聞きました。親子で通った校舎、同じ記憶を育んだ場所が取り壊されるということです。学校開放日には是非歴代の集合写真を展示して、幼い頃の父母の写真子ども達に見てもらおうと思ひ、約570枚の集合写真をスキャンして再印刷することにしました。

同じ空間で同じカメラを見つめる集合写真は、現在のデジタル写真とは違う魅力があります。写真の目線が一気に集う部屋を作りたいと考えました。写真を展示する一方で、55年の歴史ある校舎に、歴代児童の集合写真を等身大でプロジェクター投影し、その前で現在の子ども達たちが影遊びをするイメージが湧きました。過去に集合写真が撮影されていた事もある、広い多目的室を会場にする事に決め、用務員さんにもお世話になりながら棚を取っ払って壁面を作りました。この学校はどこまで寛容なのでしょう！

学校開放日当日は、「お父さん発見！」「お母さんの子どもの頃の写真初めて見た」など、親子で楽しむ姿が印象的でした。何時間もアルバムを見て楽しんでいる方もいました。一枚見るだけで話が尽きない、記憶を呼び起こす写真の力を再認識させられました。この日、子ども達からはモノクロ写真を見て「怖い」という言葉は聞こえませんでした。



### 『鯉の滝のぼり』

アルバムを見ていると、『鯉の滝のぼり』という伝統競技があることが分かりました。今年度は新校舎の工事を担当する方々が真っ白い鯉のぼりをプレゼントしてくれて、子ども達が描いた鮮やかな鯉のぼりがクレーン車で飾られたそうです。活動当初から階段を使った展示も考えていたので、鯉のぼりを運ぶ子ども達の影をトレースし、その上に鯉のぼりを展示してはどうか？と思いましたが、私には壁にペンキで絵を描く技術がありません！ここは大学の先輩で画家の久野志乃さんの助けを借りるしかありません。志乃さんと、たくさんあるペンキの色から4色を選び、壁に描くことにしました。

ライトを投射して、影を作ります。それを他の人がペンで輪郭線をなぞるのですが、「動かないで！」「もっと横向いて！」と大盛り上がりです。その線を使って志乃さんがペンキで仕上げていきます。自分が描いた線が画家の視点で抽出されて作品になるなんて貴重な経験です。「この線は私が描いた！」と嬉しそうでした。

最上階では古い運動会の写真を使った映像を投影しました。音響には、苫小牧在住の中坪淳彦さんが生命をテーマにした『種』という曲を提供していただきました。

### 『5年生パラパラ漫画授業』

図工の時間にもおじゃまして5年生にパラパラ漫画の授業をさせていただきました。好きな場所で連続した写真を撮影し、それを印刷したものにアニメーションを描いてもらいました。写真が動いた瞬間、「動いたー！」と素直な感想。そのワクワク感忘れていたなあと感じました。

### 『光陽っ子のまなざし』

玄関ではガラスの向こうに立つ子どもの姿を直接ペンで描くという方法で、志乃さんはじめ子ども達に描いてもらいました。描かれる側も描いている線の動きが見えるので面白いです。特別支援学級の子ども達と描いた玄関はとても賑やかなものになりました。



佐竹 真紀 / Maki Satake (映像作家)  
1980年豊頃町生まれ。札幌市在住。2003年北海道教育大学札幌校芸術文化課程美術コース(芸術文化学士)卒業。2005年北海道教育大学大学院、教育学研究科教科教育専攻修士課程(教育学修士)修了。  
写真を使ったアニメーションを中心に制作。「記録」と「記憶」の狭間にある世界を探究している。2011年フランスCINEDOC PARIS FILMS COOP主催招待上映。2016年ドイツドレスデン国際短編映画祭ワークショップ講師。2018年ドイツ31.Stutt-garter Filmwinter審査員など。  
<http://www.makisatake.com/index.html>



### 『在りし日の入学写真』

学校の始まりといえば入学式です。子ども達の緊張と嬉しさが混ざった表情は、いつの時代も変わりません。保護者の方へ呼びかけて持って来てくださった昔の入学式の写真プロジェクターで投影し、志乃さんに描いてもらいました。今回の活動では、自分では出来ない事を志乃さんがたくさん形にしてくださいました。本当に感謝いたします。

学校開放日の後、ありがたい会が開かれて、今までの活動の様子や、開放日に来てくださった親子の姿などを映像にまとめて発表しました。とても素晴らしい会に参加させていただきありがとうございました。

この校舎とのお別れを思い出深いものにしたいという教頭先生からの宿題は、上手く解答できたか分かりませんが、子ども達が大人になった時に変な転校生がいたなと思ひ出してくれたら嬉しいなと思います。高橋直之校長先生はじめ、先生方からも温かい目で見守っていただき、最後まで伸び伸びと活動することができました。本当にありがとうございました。そして冷たくも温かくもない丁度良い距離感で活動をサポートしてくださいました小林君に感謝いたします。

佐竹 真紀

## 『まなざし』

小学校に通い始めてから数日が経ったある日の事。控室として使っていた部屋で、ぎっしりと並ぶ数十年前のアルバムを見つけた。すぐに手に取り、一枚一枚ページをめくり、古い写真を見つめる佐竹さん。今年で55年、役割を終える校舎の片隅で、それはまるで必然だったかのように、小学校の思い出の写真と彼女は出会ったのだ。多分、この瞬間、光陽小学校でのおとどけアートの活動が大きく動き始めたのだと思う。その時の私は、「佐竹さん、やっぱり写真好きなんだな」ぐらいにしか思っていなかったけれど。

活動の軸が決まり、写真をみんなで見たり、卒業生を探しているうちに、画家の友達である久野さんと一緒に6年生に絵の描き方を教えたり、佐竹さんの旦那さんと映像作家の大島さんの協力のもと5年生とパラパラマンガを作ったり、活動が思わぬ方向に広がり始めた。その間も、佐竹さんはひたすらアルバムの写真を一枚一枚、丁寧にスキャン作業続けていた。…なんとも地味で膨大な作業なんだ、と少し想像し、恐ろしさも感じた。

あっという間に暑い夏は過ぎ、秋を飛び越え、雪が降り始めた。「3月の学校開放日に何かできたらいいね」と話していた活動のゴールが近づいていた。冬休み、子ども達のない校舎にお邪魔して、久野さんとこれからの作戦を練った。「今年で小学校は取り壊すことが決まっているので自由にできますよ」活動当初、先生に伝えられたその言葉と、コーディネーター小林が言い放った「もうどんな物ができるか想像できますね(もちろん、いい意味でだ!)」という言葉が、佐竹さんの何かを揺さぶり、学校全体を使った壮大な展示計画が立ちあがった。

そして活動は加速した。各クラスの子どもの絵が壁面に彩り、それに負けじと窓ガラスに子ども達の似顔絵、廊下に昔の写真や元にしたイラスト、階段に伝統行事の鯉の滝登りが描かれる。佐竹さんは久野さんの協力を得て、校舎のあちこちに作品を散りばめていった。その傍ら、撮影も行っていた。どこへ行くにもカメラを手にして、子ども達の生活に、学校の風景に、そのまなざしを向けていた。

学校開放日当日、多くの方々が小学校を訪れた。5年生のパラパラマンガはクラスごとに映像となって流れ、階段には各クラスで作った鯉のぼりが、過去と現在の子どもの姿が描かれた壁画によって、押し出されるように3階へと駆け上がり、最上階に映し出された佐竹さんの映像作品へと連なり昇華されていた。数百枚の集合写真が壁面いっぱい貼り出された多目的室では、各年代の卒業生



たちが懐かしげに写真の中のあの日の自分を探していた。そして、そんな時でも佐竹さんはその様子をカメラに収めていた。…まだ、撮るんですね。

活動最終日は「ありがとうの会」という全校行事がある日となった。新校舎を作ってくれた工事現場の方々メインだが、我々も最後の挨拶として少し時間をもらった。その中で、佐竹さんの最後の映像作品が流れた。誰もいない校舎、窓から見える煙突、廊下を走る子ども、給食時間、雑巾がけ、窓の似顔絵、壁の落書き。中坪敦彦さんのやわらかな音楽が心地良く流れる。鯉の滝登りの写真、壁に描かれた絵、その絵を描く子ども達、55年前の集合写真、そのひとつひとつは何度も目にしたはずなのに、映像から目が離せなくなる。突然、ひとりの少年の顔が映し出され、その子の2年生、3年生の頃の写真へと移り変わり、次第に成長していく。そして今、大人になったその少年が、同じく光陽小学校に通う自分の子どもと一緒に、こちらに笑顔向け手を振っている。…なんとも美しい映像。周りに誰もいなかったら、ポロポロと涙がこぼれるくらい、心が揺さぶられているのを感じた。

佐竹さんがカメラを向けた先にあるもの、それはありふれた日常。私たちが過ごす日々は、ゆっくりと流れ、しかし確実に形を変えていく。そんな諸行無常の現実を誰もが知りながらも、今という瞬間を記憶する事なく、日々を忘れて生きていく。でも一度立ち止まって、あの時、あの情景に目を向けると、そこには懐かしい空気と、愛おしい時間が流れていた事に気が付く。写真の中に収められた日常のひとつひとつが、佐竹さんの映像の中で鮮やかに、そして瑞々しく光を放っていた。そのまなざしで見つめていたものは、これだったんだと気が付いた。

コーディネーター 小林 亮太郎

## おとどけアートのマンガ

2023年度は光陽小学校と中の島小学校の活動の様子をマンガの形で発信しました。過去に発行したマンガは右のQRコード先からご覧いただけます。



## 心を揺さぶる「なぜ？」が生まれる

2023年度に実施したおとどけアートの各プログラムを振り返って、それぞれの特徴と成果について改めて考えてみたい。

まず、3校の学校で実施した活動に共通してみられた点は、アーティストがある種の執着心をもとに創作が展開されたことにある。

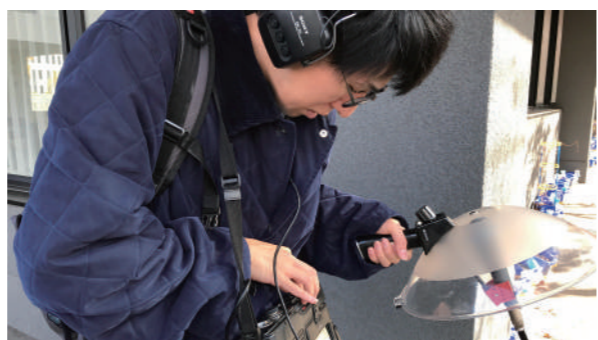
具体的に言えば、発寒小学校の東方悠平氏は「バナナ」、中の島小学校の榎引康平氏は「環境音」、光陽小学校の佐竹真紀氏は「集合写真」であった。もちろん執着するほどの対象が見出されていく経緯と理由には、それぞれの視点とこだわりがあり、一言では説明できない部分もある。ただ、アーティストによってそのアプローチには違いがあった。

発寒小の東方氏は、学校に入った当初から「バナナ」をテーマとして掲げていた。おそらく学校からしてみれば、普段の環境や地域性とも無関係な唐突感のあるテーマだったろう。アーティストは、「バナナ」を創作の中心に置くことで、バナナを取り巻く状況や歴史を検証し、その中にある社会の違和感を炙り出そうと普段からアプローチしているのだと私は想像した。

そうした社会のある事象を炙り出すシンボルとしての「バナナ」は、アーティスト本人の意思かどうかは別として「バナ活」というキャッチーな言葉で表現された。そして、バナナにまつわる様々なリサーチと制作に展開されていった。問答無用に持ち込まれたようなテーマとその活動が、結果お祭りのような盛り上がりを見せたことが今でも不思議でならない。

一方、中の島小の榎引氏は、学校に通いながら校内の音をひたすら録音していく作業に集中した。子ども達の声、足音、機械音など様々な音。アーティストにとっては発見の日々であり、拾う音ひとつひとつが新鮮であったことだろう。学校にとっての日常の「音」は、アーティストにとっては異質な「音」として受信され、興味の赴くままに行動する姿が潔くも感じられた。その結果、音は音だけの存在ではなく視覚化・言語化・映像化された。また、その成果を共有する場が生み出されていったことも子ども達の関心を惹きつけるには十分な効果があったに違いない。しかし、ガンマイクを持ち、ヘッドフォンを身につけ、校内をうろろろするアーティストの姿は一見すると異様であり不可思議な存在として映ったとも想像できる。

光陽小学校の佐竹氏のアプローチはまた独特なものであった。校舎建て替えに伴い新校舎の建設が進む中、旧校舎の解体が決定している学校のリサーチからはじまり、



©Akimoto Sanae



眠っていた開校当初からの「集合写真」の存在に目を向けた。アーティストは、そこからかなりの期間をかけて丁寧に写真のスキャン作業を繰り返し、映像制作を行なっていた。子ども達との交流と平行にひたすら繰り返されていく地道な作業。学校に残されていた写真の物量もさることながら、それはアーティストが日々繰り返している創作のあり方そのものだったのかもしれない。

また、最終的に制作した作品だけではなく、学校全体をキャンパスの様に扱っていくことや他のアーティストとのコラボレーションによる作品、集合写真を介した地域住民とのコミュニケーションの場の設定など、「集合写真」という存在に特化したからこそ生まれた多様な展開は、他のプログラムにはない新たな可能性を示唆する内容であった。

「なぜあの人(アーティスト)はこんなところに注目しているのだろうか?」、2023年度の活動を振り返ると、活動を共にするスタッフや、子ども達、教職員は、並々ならぬその執着心に触れてさぞ困惑したことであろう。しかし、いずれの活動においてもアーティストの思考や行為を無条件に受け入れてしまうことよりも、そうした疑問を抱きながら創作の過程に関わることが私は重要だと考えている。この「なぜ?」が生み出されていくプロセス、困惑こそがおとどけアートの重要なポイントであり、人々の心を揺さぶる要因となりえるからだ。

一般社団法人AISプランニング 代表理事・コーディネーター  
漆 崇博

## 教職員の声

### 発寒小学校

・(子ども達は)生き生きとしていました。また学年の枠を越えて異学年で自然に交流が生まれたのがとても良かったです。

・学校外へ出向くと負担が大きいです。学校内で、様々なお仕事をされている外部の方と子ども達が交流できることはとても素敵な取組だと思います。

・おとどけアートの謎の転校生という設定が、より子ども達に親しみやすくアーティストの方との距離をぐっと縮めていると思います。

・普段何気なく食べているバナナの知らない面がしれて、子ども達も興味を持っていたし、僕自身も楽しませてくれました。

・教育課程にどう位置づけるのかは課題ですが、取組自体は間違いなく子ども達の力を高めるので、ぜひまた、お願いしたいですね～



### 光陽小学校

・5年生や6年生にも出前授業をしていただき、教員が教えるのとは違った感性で関わっていただいたことで、自分の作品に自信をもつ子が多くなりました。

・校舎とのお別れという軸を中心に、活動を広げてくださったこと、本当に感謝しています。心温まる光景を目の当たりにし、とても感激しました。長いスパンでの活動であったことで子ども達や職員とのふれあひの中から生み出されたものもあったかと思えます。またぜひ、違う学校で関わらせていただけることを願っています。

※これらの回答は2024年3月11日～18日で実施した教職員へのヒアリング・アンケート調査回答より抜粋したものです。



### 中の島小学校

・最初は出前授業のような活動かと思ったが、そうではないんだと気付いた。説明を受けてどのように関われるのかを想定できた。

(榎引さんが)校内で音を拾っているとき、懐かしの道具(パラボラアンテナやカセットデッキなど)を使っていて、アーティストとそこに集まる子ども達が印象的だった。子ども達の興味を引いているな、と感じました。

・学校全体がアートみたいな感じになっていた。音の活動でもこうだったので、他の芸術作品、造形関係だともっとアートな感じになると思った。





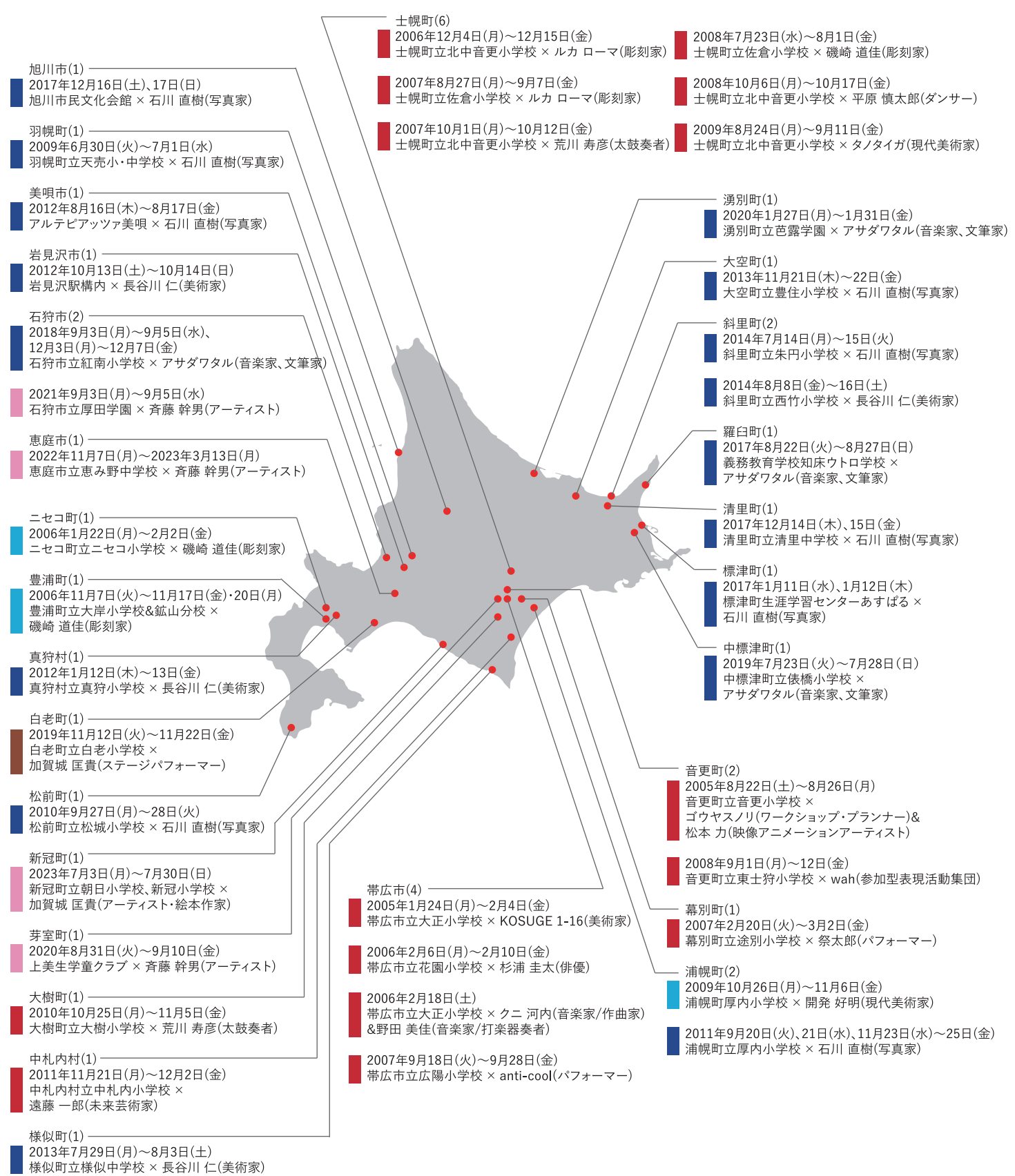
# おとどけアート&関連事業活動実績 ※所属・肩書きは各活動時点

## 札幌市(63)

- 2006年10月2日(月)～10月6日(金)・14日(土)  
札幌市立清田小学校 × 加賀城 匡貴(ステージパフォーマー)
- 2007年1月22日(月)～2月2日(金)  
札幌市立山の手南小学校 × 野上 裕之(彫刻家)
- 2007年2月5日(月)～2月16日(金)  
札幌市立有明小学校 × 石川 直樹(写真家)
- 2007年11月26日(月)～12月7日(金)  
札幌市立新陵東小学校 × 宝音&図布(版画家)
- 2008年2月4日(月)～2月15日(金)  
札幌市立新光小学校 × 河田 雅文(美術家)
- 2008年11月10日(月)～11月21日(金)  
札幌市立太平小学校 × 高橋 喜代史(美術家)
- 2009年1月26日(月)～2月6日(金)  
札幌市立幌西小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)
- 2009年11月4日(水)～11月13日(金)  
札幌市立屯田南小学校 × 今村 育子(現代美術家)
- 2010年2月8日(月)～2月24日(水)  
札幌市立北小学校 × 東方 悠平(現代美術家)
- 2010年10月12日(火)～12月3日(金)  
札幌市立清田小学校 × 長谷川 仁(美術家)
- 2010年11月8日(月)～11月19日(金)  
札幌市立福住小学校 × 斉藤 幹男(彫刻家)
- 2011年1月19日(月)～2月4日(金)  
札幌市立常盤小学校 × 富士 翔太郎(画家)
- 2011年2月7日(月)～2月19日(土)  
札幌市立旭小学校 × 片岡 翔(映画監督)
- 2011年9月26日(月)～10月15日(金)  
札幌市立稲積小学校 × 小助川 裕康(美術家、庭師)
- 2011年11月28日(月)～12月16日(金)  
札幌市立あいの里西小学校 × 富田 哲司(現代美術家)
- 2012年1月17日(火)～2月3日(金)  
札幌市立みどり小学校 × 山本 耕一郎(現代美術家)
- 2012年8月20日(月)～9月6日(木)  
札幌市立石山東小学校 × トムスマ・オルタナティブ(現代美術家)
- 2012年10月1日(月)～10月13日(土)  
札幌市立富丘小学校 × 本田 蒼風(アート書家)
- 2013年2月1日(金)～2月15日(金)  
札幌市立もみじの森小学校 × 小川 智彦(ランドスケープアーティスト)
- 2013年8月20日(火)～10月4日(木)  
札幌市立資生館小学校 × アサダワタル(日常編集家)
- 2013年9月1日(日)～12月24日(火)  
札幌市立北陽小学校 × 佐藤 隆之(芸術家)
- 2013年10月1日(火)～10月12日(土)  
札幌市立三里塚小学校 × 加賀城 匡貴(ステージパフォーマー)
- 2014年2月10日(月)～2月21日(金)  
札幌市立北陽小学校 × 風間 天心(芸術家、僧侶)
- 2014年8月20日(水)～12月6日(土)  
札幌市立北陽小学校 × 加賀城 匡貴(ステージパフォーマー)
- 2014年9月16日(火)～9月26日(金)  
札幌市立元町小学校 × ダムダンライ(芸術家)
- 2014年11月4日(火)～11月15日(土)  
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報体)
- 2015年2月9日(月)～2月20日(金)  
札幌市立山鼻小学校 × 持田 敦子(芸術家)
- 2015年9月1日(火)～11日(金)、2016年2月23日(火)～26日(金)  
札幌市立星置東小学校 × 永田 壮一郎(音楽家)
- 2015年11月2日(月)～2016年2月18日(木)  
札幌市立栄東小学校 × 小町谷 圭(メディアアーティスト)
- 2016年1月19日(日)～2月13日(土)  
札幌市立平岸高台小学校 × 黒田 大祐(美術家)
- 2015年6月18日(木)～12月24日(木)  
札幌市立北陽小学校 × halle(アーティストグループ)
- 2015年10月21日(水)～2016年2月26日(金)  
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報体)
- 2016年10月3日(月)～10月22日(土)  
札幌市立鴻城小学校 × 山崎 阿弥(声のアーティスト)
- 2016年12月6日(火)～12月16日(金)  
札幌市立西岡小学校 × 深澤 孝史(美術家)
- 2017年1月23日(月)～2月17日(金)  
札幌市立苗穂小学校 × 進藤 冬華(美術家)
- 2016年11月22日(月)～12月2日(金)  
札幌市立月寒東小学校 × 長谷川 仁(美術家)
- 2016年4月27日(水)～2017年3月24日(金)  
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報体)
- 2017年10月24日(火)～11月8日(水)  
札幌市立拓北小学校 × まるみデパート/梶高慎輔、梶高果代(アートユニット)
- 2017年11月17日(水)～12月1日(金)  
札幌市立有明小学校 × 東海林 靖志(舞踊家)
- 2017年12月1日(金)～12月14日(木)  
札幌市立山の手小学校 × 川上 りえ(美術家)
- 2018年1月22日(月)、25日(木)、2月1日(木)～13日(火)  
札幌市立澄川南小学校 × ミッシェル・アンジェリカ・カビルド(アーティスト)
- 2018年9月18日(火)～12月25日(火)  
札幌市立ひばりが丘小学校 × 上ノ 大作(陶芸家、造形作家)
- 2018年10月30日(火)～11月9日(金)  
札幌市立西園小学校 × 永田 壮一郎(音楽家、作曲家)
- 2018年11月13日(火)～11月27日(火)  
札幌市立本町小学校 × 中島 佑太(アーティスト)
- 2019年1月22日(月)、25日(木)、2月1日(木)～13日(火)  
札幌市立澄川小学校 × マドゥ・ダス(アーティスト)
- 2019年10月1日(火)～12月16日(月)  
札幌市立美しが丘緑小学校 × 森迫 暁夫(イラストレーター、美術家)
- 2019年11月11日(月)～11月22日(金)  
札幌市立手稲北小学校 × 斉藤 幹男(アーティスト)
- 2019年11月25日(月)～12月13日(金)  
札幌市立もみじの丘小学校 × 松田 朕佳(アーティスト)
- 2020年1月22日(月)～2月20日(木)  
札幌市立本町小学校 × アドルウト(アートユニット)
- 2020年10月1日(火)～12月16日(月)  
札幌市立新琴似北小学校 × 風間 天心(美術家、僧侶)
- 2020年12月4日(金)～2021年2月5日(金)  
札幌市立西岡南小学校 × 小林 大賀(作家)
- 2020年11月25日(月)～2021年2月18日(木)  
札幌市立新川小学校 × 下道 基行(写真家)
- 2021年8月26日(木)～12月20日(月)  
札幌市立手稲西小学校 × 千葉 麻十佳(美術作家)
- 2021年8月27日(金)～10月29日(金)  
札幌市立北都小学校 × フジ森(アーティストユニット)
- 2021年11月4日(木)～2022年2月1日(火)  
札幌市立発寒東小学校 × 久野 志乃(アーティスト)
- 2022年1月19日(水)～2月16日(水)  
札幌市立新川小学校 × 小助川 裕康(造園家、アーティスト)
- 2021年12月3日(月)～3月18日(金)  
札幌市立南小学校 × 斉藤 幹男(アーティスト)
- 2022年4月7日(木)～10月20日(木)  
札幌市立新川小学校 × 小助川 裕康(造園家、アーティスト)
- 2022年8月26日(木)～2023年3月1日(水)  
札幌市立琴似小学校 × クスミエリカ(フォトグラファー、美術作家)
- 2022年10月20日(木)～2023年3月16日(木)  
札幌市立藤野南小学校 × 大島 慶太郎(映像作家)
- 2023年2月1日(木)～3月16日(木)  
札幌市立伏古小学校 × 進藤 冬華(アーティスト)
- 2023年8月21日(月)～2024年3月8日(金)  
札幌市立光陽小学校 × 佐竹真紀(映像作家)
- 2023年10月18日(水)～2024年2月2日(金)  
札幌市立発寒小学校 × 東方悠平(アーティスト)
- 2023年11月1日(水)～2024年1月23日(火)  
札幌市立中の島小学校 × 櫛引康平(アーティスト・音楽家)

## 主催及び関係事業一覧

- おとどけアート事業
- 札幌アーティスト・イン・スクール事業
- さっぽろ天神山アートスタジオ
- こどもアート体験事業
- アート体感教室事業
- 文化の宅配便事業
- トヨタ・子どもとアーティストの出会い事業
- ウイマム文化芸術プロジェクト
- 十勝アーティスト・イン・スクール事業



## 新冠町立朝日小学校・新冠町立新冠小学校×加賀城匡貴

### 「<sup>にいにい</sup>新冠小学校」

児童減少に伴い朝日小学校と新冠小学校が統合することを出発点にして、アーティストと子ども達が新しい空想の学校として「新冠小学校」(通称:にいにい)をつくることを目的に掲げ、ふたつの学校間でアイデアを交換しながらイメージを具現化するワークショップを行いました。

それぞれのアイデアを交換する活動においては、「見立て(\*1)」をテーマとした活動を通してお互いの学校の特徴を発見しながら、新しい学校のイメージを膨らませていきました。

活動の前半は、主に授業での取り組みを中心に2校の学校の全児童全学年で活動を展開。後半は休み時間や放課後といった時間の中で子ども達や先生、地域の方々と交流しながら創作を進めていきました。子ども達は「見立て」の手法を用いて学校の教室や廊下、体育館、グラウンド、そのほか周辺の地域にある様々なものを見立ての作品としていき、最終的には、「にいにい」のロゴマークの制作を皮切りに、見立てによって生まれたさまざまな「にいにい」の仲間たち、キャラクター、風景を見出し、学校要覧、ポスター、プロモーションビデオなどの媒体を制作するに至りました。

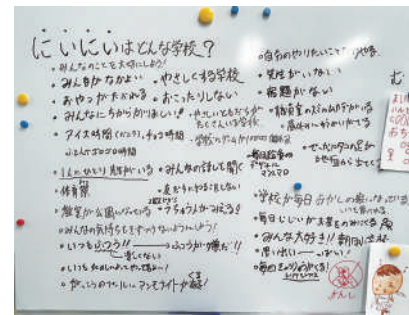
活動の最終日は、朝日小学校を会場に2校の子ども達や保護者、地域の方々の交流会イベントを企画し、その中で「にいにい」のお披露目を開催しました。

主催	公益財団法人 北海道文化財団
実施期間	2023年7月3日(月)~7月30日(日)
場所	朝日小学校・新冠小学校
参加人数	朝日小学校 児童41人、教職員14人 新冠小学校 児童214人、教職員26人
お披露目会	児童、保護者、地域の方々延べ250人
コーディネート	一般社団法人AISプランニング

\*1 「見立て」とは、既存のものを別の見方で捉えることでそれが人の顔や動物、自然はたまた奇想天外な別の何かに見えてしまうという手法のこと。

#### こどもアート体験事業

公益財団法人 北海道文化財団が主催している文化交流事業で、第一線で活躍するアーティストが道内各地の学校や文化施設に出向き、子ども達と一緒にワークショップや創作活動を行い交流をしています。おとどけアート事業の事務局を担う一般社団法人AISプランニングが、その事業の一部をコーディネートしています。



加賀城匡貴 / Masaki Kagajyo (アーティスト、絵本作家)

1975年、北海道生まれ。英ポーナムス芸術大学中退。99年に「笑い」をテーマにしたステージパフォーマンス『スケルツォ』をスタート。公演/展覧会やワークショップなど、独自の活動を続けている。企画・原案を手がけたNHK Eテレ『ミ・タ・テ』で、札幌ADC準グランプリ、東京TDC賞ノミネート。著書に、学校図書『脳トレ!パッとブック』(教育画劇)、絵本『ねぐせきょうだい』(中西出版)。



#### 札幌アーティスト・イン・スクール事業

おとどけアート2023

主催 おとどけアート実行委員会

後援 札幌市教育委員会

支援 札幌市

助成 赤い羽根共同募金

協力 札幌市立発寒小学校、札幌市立中の島小学校、札幌市立光陽小学校、鈴木ひな、秋元さなえ、大島慶太郎、久野志乃、中坪淳彦

コーディネート 一般社団法人AISプランニング

#### 札幌アーティスト・イン・スクール事業

おとどけアート2023記録集

発行 おとどけアート実行委員会

協力 札幌市立発寒小学校、札幌市立中の島小学校、札幌市立光陽小学校

寄稿 東方悠平

榎引康平

佐竹真紀

企画・編集 一般社団法人AISプランニング

おとどけアート実行委員会事務局

一般社団法人AISプランニング

〒061-3212 北海道石狩市花川北2条6丁目209番地

TEL 070-5600-8466

FAX 0133-74-1065

E-mail info@ais-p.jp

HP https://ais-p.jp/

事務局担当(小林)

TEL 070-5288-5367

E-mail ryotaro@ais-p.jp

#### 活動スタッフ募集中!

おとどけアートをもっと知りたい、活動に関わりたいという学生や一般の方々を対象に活動スタッフの募集を行っています。事前準備や打ち合わせから関わりたい方から、小学校での活動に参加したい方まで、幅広く募集をしています。実際の活動だけでなく、おとどけアートに関する説明なども行っています。一緒に活動を盛り上げたい、興味・関心のある方はぜひご連絡ください。過去の活動はブログからご覧いただけます。